『笑顔の理由』

（紀の川市優秀賞受賞）

粉河中学校　１年　中谷　綾花

今よりまだまだ幼い頃、私はとにかく笑わない子だった。同じ年の子達と比べて愛想も悪く、何をするにしても興味のない顔。自分で言うのもなんだが、少し可愛げがなかった。そんな私が、笑顔でいたいと思ったわけには今はもう亡き曽祖父が関係している。

曽祖父はすごかった。自分の興味がわいたことには何だって挑戦したし、それに見合った結果もついてくる。９０を超える歳とは思えないほど元気で、太陽みたく明るい性格。いつも「笑顔」で、みんなから尊敬されていた。手先も器用で、私はそんな曽祖父が誇らしかった。そしてなにより、曽祖父の笑顔が大好きだった。笑わない私にも、笑顔でいろんな話を聞かせてくれたし、私の話も笑顔で聞いてくれた。その笑顔を見たら不思議と、こっちまで幸せな気分になった。私はずっとこの状態が続くんだなと思っていた。でも、続かなかった。

曽祖父の入院が決定し、会える回数がかなり少なくなることとなった。やはり歳が歳だったようだ。当時の私はすごく不安だった。でもいざお見舞いに行くと、いつもと変わらない元気さで、私の大好きな笑顔を向けてくれた。名前も、忘れずにちゃんと呼んでくれた。私はすごくうれしかった。そこから、そんなに高いひん度ではないが、たまに会いに行ったりした。

時は移り変わり、そこから１年後。私はいつものように身支度を済ませ、曽祖父に会いに行った。その日の曽祖父もいつも通りだった。でも、いつも通りではないような気がした。何かが引っかかっているような感覚で、その日は帰るのを少しためらった。お母さんが困ったような顔をしていると、曽祖父が私の手に箱に入ったチョコレートを置いて、ニコッと笑った。その笑顔を見て私は「バイバイ」と精一杯の笑顔で返した。その「バイバイ」が曽祖父に送った最後の言葉となった。

その日から何日か経ったころ、曽祖父が亡くなった。今考えると、最後に私と会ったあの日、自分がもうすぐ死ぬことが分かっていたように思う。あの時、「もう少しだけでも話をしたらよかったな。」と今でも後悔している。そしてお葬式。その当時のお葬式は、今のような少人数のお葬式が主流でなかったため、私の知らない人も大勢いた。その知らない人達が曽祖父が眠っている棺を見ながら、手を合わせていた。中には泣いている人もいた。そして私の番。心の中で「泣かないように」と念じながら、おそるおそる顔をのぞきこんだ。その瞬間、私は目を見開いた。棺の中の曽祖父の表情が笑顔だったのだ。生前と変わらない、私の大

好きな「笑顔」だった。最後の最後まで、あの人は笑顔で在り続けた。私はその姿を見て笑顔を大切にしようと、そう思ったのだ。

私が出来る笑顔でもしかしたら曽祖父のように人を明るくしたり、笑顔に出来るかもしれない。その笑顔になった人からさらに広がっていって、「笑顔の輪」が広がっていくのかもしれない。そうなれば、社会まではいけなくても、自分の周りは明るくできるだろう。

今、私は中学１年生。まだまだ新しい制服を着て、青くすんだ空の下、曽祖父がくれたお守りに笑顔を向ける。未来の私も、今と同じで居られるのだろうか。こんな私の笑顔で人を明るく照らせるならどんなことがあろうと、この世からいなくなる最後の日まで笑顔でいたい。